

ヴェロニカ・エーベルレ

ヴァイオリン・リサイタル

2023年9月9日(土) 14:00開演

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 小ホール



山田 武彦(ピアノ)

© Felix Broede

滋賀県立芸術劇場
びわ湖ホール

チケット
好評発売中

公演インフォメーション

◆室内楽への招待 カザルス弦楽四重奏団

スペインが生んだ国際的に高い評価を受ける弦楽四重奏団が遂にびわ湖ホールに初登場。結成25周年の節目を迎えたカルテットが、西洋の音楽史上最も深遠な対位法作品「フーガの技法」を全曲演奏します。

11月5日(日) 14:00開演 [小ホール] (13:30開場、15:40終演予定)

[曲目] J.S.バッハ: フーガの技法 ニ短調 BWV1080(全曲)

[料金] 一般 4,950円(4,400円) 青少年(24歳以下) 2,200円

◆室内楽講座 なぜ弦楽四重奏でフーガの技法をとりあげるのか

10月21日(土) 19:00~20:00 [小ホール] (18:30開場)

[講師] 小峰航一(京都市交響楽団 ヴィオラ首席奏者)

[料金] 550円(当日会場にて)もしくはカザルス弦楽四重奏団のチケットご提示で無料

◆石田組(弦楽アンサンブル) 【石田組 2023/2024 アルバム発売記念ツアー】

神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席ソロ・コンサートマスター、京都市交響楽団特別客演コンサートマスターである石田泰尚がプロデュースするカリスマ的人気を誇るユニットが2021年に続き2回目の登場！

石田組初披露となるシューベルト「死と乙女」など、プログラムもごうご期待！

11月26日(日) 14:00開演[大ホール] (13:15開場)

[出演] 石田組

ヴァイオリン: 石田泰尚、塩田 脩、伊東翔太、竹内 弦、丹羽洋輔、田村昭博
ヴィオラ: 木下雄介、萩谷金太郎、古屋聡見
チェロ: 辻本 玲、森山涼介、松尾美弦
コントラバス: 米長幸一

[曲目] シューベルト(マラー編) 「死と乙女」(弦楽合奏版)

グリーク 二つの悲しき旋律

クイーン(松岡あさひ編) ボヘミアン・ラブソディ 輝ける7つの海 他

[料金] S席: 4,950円(4,400円) A席: 3,850円(3,300円) 青少年(24歳以下) 1,650円

チケット取り扱い・お問い合わせ

びわ湖ホールチケットセンター ☎077-523-7136

(10:00~19:00/火曜日休館、休日の場合は翌日)

びわ湖ホールホームページ <https://www.biwako-hall.or.jp/>

()内は友の会会員料金。全席指定・税込。



滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜15番1号

TEL 077-523-7133

<https://www.biwako-hall.or.jp/>



テレコイルのついた補聴器や人工内耳を使用されている方は、
テレコイルモードに切り替えるとヒアリングループマークを利用した音声をお楽しみいただけます。

※お客様へのお願い

- 会場内での撮影および録音はできません。
- 本日の公演では携帯電話電波抑止装置を作動させています。ご了承ください。
- 医療機器をお使いの方は、状態をご確認いただきますようお願いいたします。
- やむを得ない事情により、曲目等が変更になる場合があります。

日本音楽財団・全国公立文化施設協会共同事業
ストラディヴァリウス・コンサート

ヴェロニカ・エーベルレ ヴァイオリン・リサイタル

2023年9月9日(土) 14:00開演

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 小ホール

主催：日本音楽財団、全国公立文化施設協会
滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

助成：日本財団



びわ湖ホールオフィシャルスポンサー

叶匠壽庵



平和堂



木の家専門店

谷口工務店

出演

ヴェロニカ・エーベルレ (ヴァイオリン)

Veronika Eberle Violin

山田 武彦 (ピアノ)

Yamada Takehiko Piano

使用楽器

ストラディヴァリウス1700年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」
Stradivarius 1700 Violin "Dragonetti"

このヴァイオリンはネックの部分までも製作当時のものがそのまま使用されているとても貴重な楽器である。著名なイタリアのコントラバス奏者ドメニコ・ドラゴネッティ(1763~1846)が所有していたことから現在この名前と呼ばれている。直前には、世界的に名を知られているヴァイオリン奏者、フランク・ペーター・ツインマーマン(1965~)によって演奏されていた。現在は日本音楽財団が所有し、ヴェロニカ・エーベルレに貸与している。



プログラム

◆モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ ヘ長調 K.377

W.A.Mozart : Violin Sonata F Major K.377

第1楽章 アレグロ Allegro

第2楽章 アンダンテ Andante

第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット Tempo di Minuetto

◆チャイコフスキー：なつかしい土地の思い出 op.42

P.I.Tchaikovsky : Memory of a Dear Place op.42

瞑想曲 Meditation

スケルツォ Scherzo

メロディ Melody

◆バルトーク：ラプソディ 第1番 Sz.86

B.Bartók : Rhapsody No.1

第1楽章 モデラート Moderato

第2楽章 アレグレット・モデラート Allegretto Moderato

～休憩～

◆クララ・シューマン：3つのロマンス op.22

C.Schumann : The Three Romances op.22

第1楽章 アンダンテ・モルト Andante molto

第2楽章 アレグレット Allegretto

第3楽章 情熱的に急いで Leidenschaftlich schnell

◆ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 op.100

J.Brahms : Violin Sonata No.2 in A Major op.100

第1楽章 アレグロ アマービレ Allegro amabile

第2楽章 アンダンテ・トランキイロ - ヴィヴァーチェ

Andante tranquillo - Vivace

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ Allegretto grazioso

❖ プログラム・ノート

青澤 隆明(音楽評論家)

ヴェロニカ・エーベルレのヴァイオリンは、率直で伸びやかな魅力に充ちている。情感的にも様式的にも清明な良さが、さまざまな作品を通じて、まっすぐに伝わってくる。

サイモン・ラトルに見出され、17歳のときベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演したのが世界的な注目の始まりとなったが、曲がベートーヴェンの協奏曲であったことは、南ドイツに生まれ、ミュンヘンで教育を受けたエーベルレの出自だけでなく、確かな音楽性が見込まれてこそ。ソリストとしての華々しい活躍だけを追うのではなく、じっくりと音楽を育んでいるとみてよいのだろう、室内楽の演奏も積極的に行ってきた。マーティン・ヘルムヒェンや石坂団十郎とのドイツ新世代のトリオなど、日本でも聴かせてきたように。

じつは最初に、ノーブルで清らかな響き、という美観を記そうと思ったのだが、それはまた彼女の音楽上なによりの相棒とってよいストラディヴァリウスの銘器の特質でもある。エーベルレは楽器を素直に鳴らすので、ほんとうに良い音がするのだ。

かつての所有者の名を称えて「ドラゴネッティ」と呼ばれるこのヴァイオリンは1700年製で、ネック部まで当時のものが活きる年代ものだ。本日のプログラムのどの曲よりも古く、大バッハの若者時代に遡る歴史を生きぬいてきた。それだけの作品と演奏、時代と歳月の記憶が滲み込んでいることになる。

日本音楽財団が、才能ある演奏家を見込んで大切に貸与している生きた音楽財産である。以前には先の世代ドイツの傑出した先達であるフランク・ペーター・ツインマーマンが愛奏していたが、そのときも抜群にきりとした佇まいで、麗しい音が鳴っていた。それがまたさらに若い世代の名手へと渡され、音楽的な充実と成長をもたらしているのは得難いことだ。

18世紀のモーツァルトから、19世紀のロマン派、バルトークの20世紀までを広く旅するリサイタル・プログラムは、山田武彦の自在なピアノといきいきと対話を交わしつつ、しなやかで清らかな弦の魅力多彩な変化のなかに歌い上げるだろう。

◆モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ ヘ長調 K.377

ザルツブルクに生まれたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の鍵盤楽器とヴァイオリンのためのソナタの創作は、「ヴァイオリン伴奏付きのクラヴィーア・ソナタ」の地平から出発し、やがてヴァイオリン・パートの比重を増した志向を探っていく。1781年の夏にウィーンで作曲されたヘ長調ソナタK.377は、11月に6曲のソナタ集の第3曲として出版された。とくに最初の2楽章では、ピアノが速いパッセージを活かして、華麗な効果を上げる。

曲は、アレグロ、アンダンテ、テンポ・ディ・メヌエットの3楽章で構成されている。大規模な中間楽章では二短調をとり、主題と6つの変奏が哀感をもって歌い込まれていく。

◆チャイコフスキー：なつかしい土地の思い出 op.42

19世紀後半のロシアに生きた作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)には、ヴァイオリン協奏曲 op.35の傑作があるにも関わらず、ヴァイオリンとピアノのための作品は稀少だ。

『なつかしい土地の思い出』 op.42はもともとその協奏曲の中間楽章として構想され、1878年3月にすばやく書かれたが、短さもあってか、協奏曲では用いられなかった。しかし作曲家は、これを改作して「瞑想曲」(二短調)とし、同年5月に作曲した「スケルツォ」(ハ短調)、「メロディ」(変ホ長調)を加えて、曲集『なつかしい土地の思い出』 op.42として出版した。チャイコフスキー天性の歌心が伸びやかに溢れる魅力的な作品である。

◆バルトーク：ラブソディ 第1番 Sz.86

バルトーク・ベーラ(1881～1945)は、母国ハンガリーに根ざした独自の音楽を確立すべく、バルカン半島や中近東にもおよぶ民族音楽の研究からその語法を抽出し、前衛的な実験音楽の表現を採用しつつ、20世紀音楽の道を拓いていった。

「ラブソディ 第1番」 Sz.86は、1928年に作曲された2作の最初のもので、トランシルヴァニアの民族舞踊にもとづく作品で、名手ヨーゼ

フ・シゲティに献呈された。かの地域の民族舞踊の様式に沿って、モデラートのゆったりした第1部と、アレグレット・モデラートの急速な第2部という、コントラストの強烈な構成をとっている。

◆クララ・シューマン：3つのロマンス op.22

クララ・シューマン(1819~96)は、早熟なピアニストとして名高いだけでなく、作曲もさまざまに手がけた。夫ロベルトと同様に「ロマンス」と題した歌心に満ちた作品も好んで書いた。

『ピアノとヴァイオリンのための3つのロマンス』op.22は1853年7月に作曲され、夫妻の親友である名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムに献呈された。彼がブラームス連れ立ってデュッセルドルフのシューマン家を改めて訪問したのが同年秋のことだ。ドイツ・ロマン主義の天才たちの友愛が花咲く時期に生まれた、豊かな抒情と色彩に満ちた果実である。3つの曲は順に、アンダンテ・モルト(変ニ長調)、アレグレット：繊細さをもって(ト短調)、情熱的に急いで(変ロ長調)。

◆ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 op.100

ヨハネス・ブラームス(1833~97)は3曲のヴァイオリン・ソナタを出版した。1878年夏、40代の半ばで作曲した第1番ト長調op.78の数年後、交響曲第4番ホ短調op.98の完成の翌年、1886年にスイスのトゥーン湖畔の雄大な自然と友人たちに囲まれて書かれたのが第2番イ長調op.100。ブラームスの旋律家としての天分が、ヴァイオリンの憂いを帯びつつも優美で明朗な声に託された名作となった。

曲は、アレグロ・アマービレ(イ長調)のソナタ形式楽章で始まり、中間楽章はアレグロ・トランキロ(ハ長調)とヴィヴァーチェ(ニ短調)の部分が緩急交互にあらわれる構成、アレグレット・グラツィオーソ(クワジ・アンダンテ)(イ長調)のロンド形式の終楽章で結ばれる。

プロフィール

ヴェロニカ・エーベルレ(ヴァイオリン) *Veronika Eberle, Violin*



ドイツ南部のドナウヴェルトに生まれ、6歳からヴァイオリンを始める。4年後にミュンヘンのリヒャルト・シュトラウス市立音楽院にてオルガ・ゴルコヴァの下で学び、1年間、クリストフ・ポツペンからプライベートレッスンを受けた後、2001年から2012年までミュンヘン音楽大学にてアナ・チュマチェンコに学んだ。

17歳の時、サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲で共演し、世界の注目を集めた。

これまでに、ロンドン交響楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団、ロサンジェルス・フィルハーモニック、NHK交響楽団などのオーケストラと共演している。指揮者では、サイモン・ラトル、ベルナルト・ハイティンク、ダニエル・ハーディング、クリスティアン・ティーレマン、ヤニック・ネゼ=セガン、ケント・ナガノ、パーヴォ・ヤルヴィ、アラン・ギルバート、ロジャー・ノリントンなどと共演を重ねている。

2003年、マイantz(ドイツ)のイフラ・ニーマン国際コンクール優勝。2011年から2013年には英国BBC Radio3のニュージェネレーション・アーティストにも選ばれた。

山田 武彦(ピアノ)

Yamada Takehiko, Piano



東京藝術大学作曲科卒業、同大学院作曲専攻修了。1993年フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院ピアノ伴奏科に入学、同クラスの7種類の卒業公開試験を、審査員の満場一致により首席で一等賞(プルミエ・プリ)を得て卒業。帰国後はピアニストとして数多くの演奏者と共演、的確でおおらかなアンサンブル、色彩豊かな音色などが好評を博し、コンサート、録音、放送等の際のソリストのパートナーとして厚い信頼を得る。近年は「クラシックカフェ」マスター役、「イマジンセタコンサート」「山田武彦と東京室内歌劇場」「浅草オペラ」ロングラン

公演の音楽監督を担当するなど、ユニークなコンサートの企画にも参加している。これまで洗足学園音楽大学に於いて作曲及びピアノコース統括責任者を歴任。現在同大学教授、東京藝術大学招聘教授。